

## 北海道の産業クラスターづくりの課題



左2人目から戸田氏、筆者、瀬尾氏

### 川崎 一彦

北海道東海大学教授

#### 戸田一夫さんを惜しむ

10月に戸田一夫氏が逝去された。戸田さんは、1996年に北海道産業クラスター創造研究会を全国に先駆けて発足させ、2001年に設立された同構想を実践推進する北海道科学技術総合振興センター（ノーステック財団）理事長を務められた、北海道の産業クラスター活動の提唱者、生みの親である。

私は '94年から数回、戸田さんと一緒に北欧を視察する貴重な機会を得たが、私利私欲が全くなく、北海道のベストだけを考える真摯な姿勢はすぐに伝わってきた。「人生の師」（瀬尾英生氏）「第二の父」（常俊優氏）と、次世代の後継者と目される方があがめられるのも納得できる。

#### 成果をあげているクラスターづくり

戸田さんが火をつけた北海道の産業クラスターづくりは着実に成果をあげてきている。

'05年度は約33億円の売り上げを達成、事業化したプロジェクトは累計で83件、74億円に達した。今後5年間の累計売り上げ目標は150億円である。<sup>\*1</sup>

北海道に数年遅れて '01年から経済産業省の産業クラスター計画、'02年から文部科学省の知的

クラスター創成事業が始まったが、北海道の地域主導、産学官のネットワーク、道内29地域にあるクラスター研究会などはユニークで、国内外からの視察が相次いでいる。北大構内に建設された北海道産学官協働センター（愛称「コラボほっかいどう」）は、研究交流促進法改正による適用第一号で国有地内に建設された。

当面の課題としては、現在3、4割程度の道外、海外での売り上げ比率を拡大するための販路づくりとマーケティング、各地のクラスター研究会の活動を具体的なビジネスにつなぐ仕組みづくりなどがあげられる。

#### 愚公、山を移す

戸田さんは、クラスターかわら版26号（2004年7月発行）に書かれた記事のなかで、中国古典『列子』の中にある寓話「愚公、山を移す」<sup>\*2</sup>を引、「我々が持続可能な北海道を創ることを目指した時、前を遮る山は二つある。一つは依存心という山であり、もう一つは利己心という山である。二つの山を除く為の努力を明日からと言わず、只今から始めなければならない。その愚かさを笑われようとも、一かけらずつでも東京へお返ししようではないか」と語っている。

戸田さんがわれわれに残された課題である。

#### “依存心”の山を取り除く

“依存心”の山を取り除くためには、自分で考え、自分で判断し、自分で行動する創造的な道民が必要である。知恵競争の時代は「自ら知恵を出し、独自の取り組みをしなければならない」<sup>\*3</sup>

米国の研究者R. フロリダは、『The rise of the creative class（創造的階級の台頭）』<sup>\*4</sup>で、米国ではすでに就業者の3人に1人が考えることを職業とする創造的階級に属し、旧来とは違う独自のライ

<sup>\*1</sup> 『クラスターレポート2006』（ノーステック財団）

<sup>\*2</sup> 愚公という90歳近い老人が、南への交通の妨げになっている二つの山を崩して、遥か彼方の渤海に捨てようと家族と相談して実際に行動を始めた。これを見て近所の老婆が愚かと笑った時、愚公は、我が子孫の続く限り運べば、山は高くならないのだから、必ず成し遂げられると返事をしたという。その言葉を聞いた山の神は恐れをなして、天帝に訴え、天帝はその二山を別な土地に移したという。

<sup>\*3</sup> 『北海道産業クラスター創造活動の原点—戸田一夫のこぼり—』（ノーステック財団2006.10.20）

<sup>\*4</sup> 『The Rise of the Creative Class: And How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life』（Richard Florida, Basic Books, 2002）

フスタイルと価値観を持っていると分析している。

創造的階級は3つのT、すなわち、Technology=技術、Talent=人材とTolerance=許容性がある魅力的なまちや地域に集まり、そこに企業が引き寄せられて来る。企業が創造的人材を求めてやって来るのであり、その逆ではないという。

スウェーデン・ヨーテボリ大学から '06年春に北海道東海大学に来ていた留学生が、日本と北海道の「創造的階級」について調査した結果、日本はアメリカや北欧より10年遅れており、北海道は日本の平均よりも低い位置にあることが分かった。まさに、北海道にとっては、創造的人材をいかに育成し、引き寄せるかが課題である。

戸田さんは近年、早期からの人材育成の重要性に注目され、教育改革道民協議会や幼稚園への支援を惜しまれなかった。

私自身はフィンランドの「内的起業家精神教育」に学び、幼稚園からの創造性、自己効力感の育成を目指す「知的財産教育の東海モデル」の実践研究に努力しているところだ。

### “利己心”の山を取り除く

戸田さんは、連携・協働を強調し、「一人で出来ることには限界があり、集まって力を合わせる事が大事」と訴えられた。

“利己心”という山を除去するにはどうするとよいのか。舘岡康雄氏が今年4月に刊行された『利他性の経済学－支援が必然となる時代へー』が大きなヒントを与えてくれる。

アダム・スミスを始祖とする市場経済の理論は「利己性の経済学」である。すなわち、「自身の最大価値を実現するのが経済合理人であるという経済理論の前提を、私たちは信じ込まされてきた」。しかし、自己利益追求の結果、世界は解決困難な諸問題に直面、舘岡氏は「人は人を助けることを前提とする理論の構築」を目指している。

舘岡氏は、今起きている世界の底流の変化を3つあげる。

- (1)つながり・関係性が飛躍的に広がってきている。
- (2)観察系から参加系に移ってきている。
- (3)関係性のルールがあらかじめ決まっていない。

そして、その背景には「今後三年間の情報量は、現在までの人類の歴史におけるすべてのデータ量

を上回る」(米HP社のフィオリーナ元CEO)という「情報爆発」もある。

舘岡氏は、新しい時代のキーワードを、利他性を内包する「支援」とした。管理・コントロール的「リザルトパラダイム」経営から、相手との変化や違いという“関係”を支援することで、より大きな全体利益を生み出すことになる「プロセスパラダイム」経営への移行が、日常的人間関係の構図とも連動して描かれている。

「してもらうこと」と「してあげること」を交換することによる世界が必然になるとの主張だ。

福祉国家スウェーデンで『親切であることの術』(カロリンスカ医科大学ステファン・アインホーン教授)という本がベストセラーになっている。この本のメッセージは『利他性の経済学』と驚くほど共通性が大きい。

利他性の経済学が先進国共通の課題であることを再認識するとともに、東洋的一元論思想のグローバルな汎用性に期待する一人として、その思想の拡散に期待したい。利他性に早くから注目された戸田さんはやはり偉大である。

### 先ず自ら動くべし

戸田さんの口癖の一つは、「先ず自ら動くべし」であった。私自身は、「北海道があなたに何ができるのを問うのではなく、あなたが北海道に何ができるかを問え」と、ケネディー元米国大統領流に解釈してきた。

戸田さん亡き今、改めて自分自身がどのように動くべきかを考えたい。また、戸田さんの点けられた火を消さないように、次世代の後継者と目される方々に期待していきたい。

---

### profile

川崎 一彦 かわさき かずひこ

1947年滋賀県生まれ、日本貿易振興会(ジェトロ)ストックホルム事務所勤務、北海道東海大学助教授を経て'93年から北海道東海大学教授。主な関心分野は北欧と日本の企業経営の比較。東海大学知的財産教育研究グループのメンバーとして、初等中等教育における起業家精神教育の実践研究中。主な著作に『スウェーデンハンドブック』(早稲田大学出版部)、『フィンランドから学ぶ教育と学力』(明石書店)、『Softland Plan for Hokkaido』(Japan Spotlight July-August/2006)等がある。(社)スウェーデン社会研究所常任理事、(社)北方圏センター専門委員。ストックホルム大学派遣教授、はまなす財団北海道スタンダード検討委員会座長等の公職を務めた。

---